
十字夜の月に祈る

宮村 鴻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十字夜の月に祈る

【Nコード】

N2854B

【作者名】

宮村 鴻

【あらすじ】

神父が出会った少年は、誰からも必要とされていない子供だった。しかし、神父は少年に居場所を与え、名前を与え、彼の生きるすべてを与えた。少年は神父に救われたし、神父もまた少年に救われていた。そんな二人の全てが詰まった共同生活を綴る。

第一夜：邂逅（前書き）

全てはフィクションでございます。

作中の風習を肯定するわけでも、批判する訳でもございません。

第一夜：邂逅

私が彼と出会ったのは、暗く汚れた街の路地裏だった。

その日は月に一度の会合の日で、私は教会の近くに住む方たちと一緒に帰途に着いていた途中だった。歩いていたら私の頭に突然鋭い痛みが走る。それは警告のようにいつまでも続き、私はつい足を止めてしまった。

「神父さん？　どうかしたんですかい？」

心配してくれたゲイルさんに苦笑いを返して、私はこめかみに手を当てた。

「すみません。急に頭痛がして。少し、休んでから行きますから、みなさんは先に行ってください」

「でも、神父さん……」

「すみません。先に、行ってください」

私の顔には作ったような笑みが浮かんでいるに違いない。ゲイルさんたちの表情を見ていれば分かる。しかし、私が強く言い直せば彼らは渋々私に背を向けてくれた。

彼らの姿が見えなくなるころ、私の頭痛はもつと酷くなっていた。「何が、あるというんだ……？」

私は額に手を当て、近くの民家の壁に寄りかかって一息つこうと歩き出したが、それは叶わなかった。

私の右手側から烈火のような殺意と氷のような寒気が襲ってきた。私はそのままの姿勢から動けなくなった。気配は動く様子はないが、危険なことに変わりはないかった。

動いてはいけない、向いてはいけない、と自分に言い聞かせてみるが意味はなく、私はゆっくりと手を離し、横を向いた。その先には家屋の間の狭い隙間が伸びており、私は恐る恐るそちらに足を向けた。

「誰か、いるのか……？」

私は闇に声を投げ掛けたが、返事はなく、そのまま路地裏の闇に身体を投じた。

月明かりに闇の中が照らされ、浮かび上がるのは細い体躯。年齢としては、十四かそこらか。

少年は左手に首のない猫の死体を掴み、それを捧げ上げて口元に当てていた。聞こえてくるのは、肉を咀嚼する音と血をすすする音。不意に彼は猫の腹に口を近づけると無造作に腸 はらわた を引き出した。

ずるり、と伸ばされる腸は月明かりにてらてらと光っている。ゆっくり飲み込んでいく彼の口元は暗く濡れ、血がこびりついていることが分かった。

「……っ」

喉元が上下し、唾液を嚥下した。びっくり、と少年がこちらを向く。外気に触れていない音でさえ聞き取るといのか。

少年の瞳は真っ直ぐと私を射抜いていた。鋭い眼光に私はつい後退りをする。猫は興味を失った少年によって投げ捨てられ、胴体と別れを果たした頭部に埋まる瞳はうつろに私を見つめていた。

私もあのようになるのだろうか――

私は少年を見た。得物を持っているような様子はない。

だんだんと近づいてくる彼は思っていたより小柄な身体をしていた。

「…あんたは、うまいかな」

囁く声は甘く。脳内に直接麻薬を入れられたようにめまいがする。少年は直も近づいてきて、ついに私の服を掴んだ。首筋に鼻を寄

せ、匂いを嗅ぐ姿は獣を思わせる。私はこの後に訪れるだろう様々
を思い、目をきつく閉じていたいくら待っても痛みは到来しない。
私は不思議に思っただけで恐る恐る目を開けた。

私を圧倒した少年はあろうことか私の胸元で心地よさそうに寝息
をたてていた。満腹で気がすんだのか立ったまま器用に眠っている。
「…どうしますかね、この子。神よ、連れて帰れ、とおっしゃるの
ですか？」

自然に洩れたため息と共に持っていたハンカチで少年の口元の血
を拭って、私は彼を担ぎ上げた。肩にかかる重さは苦痛ではなく、
むしろ軽すぎるほどだ。

「まるで野良猫、か」

独り言を吐けば、頭痛が治まっていることに気付いた。

「出会うべくして出会った運命。素晴らしいじゃないか」

まだ少しふらつく頭を左右にゆるく振り、前を見据えると私はゆ
っくりと歩き出した。

第一夜：邂逅（後書き）

拙い文章ですが、ここまで読んでくださった皆さん本当にありがとうございます。

感想、評価お待ちしております。

第二夜：認識

自宅に連れて帰った彼が目覚めたのは、次の日の昼ごろだった。

彼を寝かしつけた寝室から物音が聞こえ、私は仕事の手を止めて寝室に顔を出した。私の侵入に対し、部屋の奥で臨戦体勢をとり、私を注意深く観察する様は本当に野良猫そっくりだった。

私は敵意がないことを得意の笑顔で示し、彼に近づいた。

「…あんた、何者？」

「ひどいな。昨日、私のことを襲ったというのに覚えてないとは」

「襲った？ それにしちゃあ、あんたぴんぴんしてんじゃん。俺が襲ったヤツは大抵死んじゃうんだけど」

「君が勝手に放棄して眠ったんだろう？ まったく、少しは襲う側としての自覚をもつたらどうなんだい？」

私は本気で彼に言ったのだが、彼は突然笑い出した。意味が分からず押し黙っていると咳き込むまで笑い続け、さらには警戒を解いてしまった。

「あんた、自覚って…、自覚があつたらいいのかよ？」

「殺す側はいつか殺される責を負う。それが分かっている方がいいんだよ」

「変な神父。みんながあんたみたいだったらいいのに」

彼の指摘に自分が司教服を着ているのを思い出し、不可解な彼の言動が気になった。

快活そうな表情は消え、視線は床の一点を見つめたまま動かない。過去に何かあったのだろうと容易に想像出来たが、私は何も尋ねる気にならなかった。

「君、今何処に住んでるんだい？」

「住む場所なんて、何処にでも。一昨日は二区の路地裏で寝たよ」

「そうか。なら、うちで私の手伝いをしてくれないかい？ 君が望

むなら、読み書きも教えてあげよう。幸いこの家はもう一つ部屋が残っていてね。ちょうどいいと思うよ」

「は？　なんでそんな？」

「今私と君が会ったことにきつと意味があるからだよ。」

それにちょうど助手も欲しかったんだ」

「そっちが本音かよ」

そう問う彼に笑顔で本当のことを隠して、私は彼に返答を促した。彼はうつ向いてしばらく考える素振りを見せた後、小さく、本当に小さく頷いた。私はそれが嬉しくて、思わず彼の細い身体を抱きしめた。

「なっ！　ちよつと、なんだよ」

「私は君の幸せを願っているよ」

私はこの溢れた気持ちをはっきりと現せる言葉を持ち合わせていない。それが、もどかしく、ただ彼を抱きしめることしかできなかった。

「苦しい…」

腕を叩かれて私ははっと我に返った。

「ごめん。つい嬉しくなっちゃってね」

「なんだよ、それ」

「気にしないでいいよ。それより、…君の名前はなんて言うんだい？」

彼を解放して、そう問うてみれば、彼はまた表情を暗くしてうつ向いてしまった。

彼をベッドに座らせると、私は彼と視線の高さを合わせる為に膝をついた。そして彼の顔を見上げながら、再度問いかけた。その問いに対する答えは、私の予想の範囲を越えない悲しいものだった。

「名前なんてない。呼ばれたこともない」

「じゃあ、エコーなんてどうだい？」

「え？　…エコー？」

「君の名前、だよ」

どうか、と聞いてみればエコーは大きく目を開いて何も言わな

かった。しかし、一瞬のあと、彼は私に抱きついてきた。ぎゅう、という音が聞こえるくらいに強く、エコーは私にしがみついた。

「名前、呼んで」

私は彼に請われるままに何度も名前を呼んだ。今までの彼の人生に足りるように。

しばらくすると、満足したのか催促の声が聞こえなくなった。

そつと身体を離すと、彼は静かに涙を流していた。

「ありがとう。本当に嬉しい。…ねえ、あなたのことはなんて呼べばいい？ 俺も、呼びたい」

「大抵の人は私を役職で呼ぶが、他の人と一緒に嫌だろう？ 名前でもいいんだが、これから私は君に色々なことを教えることになるし、とりあえず、先生、でいいよ。ついでに私の名前はリンデンだ」

「先生。リンデン先生。俺はずっとあなたと一緒にいたい」

彼は少年期特有の大きな目に真摯な光を宿し、私の手を握りしめてそう言った。あの暗い路地裏で出会ってから、やっと彼の本当の表情を見た気がした。

私とて、今まで一人で生きてきたようなものだ。連れができるということは大変嬉しい。しかし、彼の食事は到底、他人に理解されないものだろう。ここで私と共に生きていくのだとしたら、私は条件を出さなくてはならない。

「エコー、一つ約束してくれるかい？」

「何？ 先生」

「君の食事のことだけど、これからは私の作った食事を食べてくれるかい？ できるだけ、今までみたいな食事は控えてほしい」

「……どうして？」

「先刻殺す者は殺される覚悟を持たなければいけないと言っただろう？ ということは、これから君が殺し続けるなら、いつか君は殺さ

れてしまう。そうすれば、私とは一緒にいれなくなるかもしれない。
…それでもいいのかい？」

…我ながらずい言い訳だと思った。私は、私自身の居場所を確保する為に、この子の気持ちを利用しているだけだ。聖職者たる私が恥ずかしい。

しかし、私は懸命に彼から視線は外さなかった。しばらくの見つめ合いの後、先に視線をそらしたのは彼だった。

「分かった。…先生が言うなら、頑張ってみる。その代わり、おいしいご飯作ってよ？」

「ああ、もちろんだとも。ありがとう、エコー」

なんて純粹なんだろう。私の言うことを一つも疑わず、彼はその残酷なまでの素直さで頷いた。この性格がいつか彼にとって不利なことになりはしないかと、私は恐ろしくなった。

かくして、私と彼との共同生活が始まったのだ。

第二夜：認識（後書き）

やっと物語が動き出しました。

これからもおつき合いしていただけたら光栄です。

第三夜：転機

エコーの学習に対する飲み込みの早さには目を張るものがあつた。文字はすぐに覚えだし、読み書きも比較的早く習得した。毎週行ふミサにも参加しているせいか、自然と言葉遣いが変わり、この頃では初めて会ったときとは比べものにならないくらい、礼儀正しい少年になっていた。

「先生、出かけるんですか？」

「そう。街廻りに行つてくるよ」

彼が日課としている教会の庭掃きをしている最中に私が外に出れば、彼は笑顔で私を迎えてくれた。

伸びっぱなしだった髪を整え、私が修行中に使っていた白のローブを着ていれば、どこから見ても見習いの修道士にしか見えない。

「まあ、危険なこともないとは思いますが、気をつけてくださいね。あと、もし、万が一、何かもらえたらちゃんと持ってきてください」

「ハハ、ちゃっかりしてるな。…もう教会の仕事には慣れたみたいだね」

「いや、まだまだですよ」

彼はにこりと笑つて、掃除を再開させた。それにつられるように私も本来の自身の仕事に頭を切り替えた。

街を歩いていくと、大抵の人が私に声をかけてくれる。この街では教会は一つしかないのだから、当然と言えば当然なのだが、それでも声をかけてくれるのは嬉しい。

不意に後ろから私を呼ぶ声がして振り返ると、近くで牧場を経営している婦人がいた。恰幅が良く、働き盛りの印象を受ける。快活に笑っていた彼女はその笑顔を潜め、私に手招きをすると声を潜め私に耳打ちをした。

「ねえ、神父さん。この頃、教会にいるあの子、どこから連れてきたの？」

「何故、そのようなことを？」

「あの子、なんか変じゃない？ 私、見ちゃったのよ。この前教会に伺ったんですけどね。あの子、教会に住み着いてた猫ちゃん的首捕まえてね。物凄く恐い顔で猫ちゃん見てたのよ。でもね、私、物音立てちゃって、そのときのあの子の顔と言ったら…、ホントに怖かった。あの子、本当に危ないわ」

「大丈夫ですよ。教会は神聖な場所です。悪いものは入って来られません」

一瞬、ドキリとしたが、私は得意の笑顔でもって、彼女の説得にかかった。

しかし、彼女の一人説得したところでなんの解決にもならず、おそらくではあるが、もう何人かの人に噂は広がっているだろう。婦人方の情報網を侮ってはいけない。

「…そう。神父さんがそう言われるなら、少しは安心だけど。注意した方がいいと思うわよ」

「はい、ありがとうございます」

私が納得したように頷くと、彼女はまたいつもの快活な笑顔に戻った。その後、彼女からチーズを頂き、私はまた街廻りを再開した。

今日の街廻りで婦人方から聞く大抵の話は牧場の彼女と同じく、エコーの事だった。

私はエコーの事を信じている。しかし、真実かどうかは自分の目で確かめなくてはならない。

一通り街の方々と話をした後、帰途に着いた。

教会の庭先では、エコーが箒を片手に足元で戯れる猫を見下ろしていた。その瞳は暗く濁っており、私は声をかけるのもばばかられた。

エコーはふと箒から手を離し、猫を抱き上げた。そのまま、猫の首筋に顔を埋めようとした。私はとっさのことに声が出ず、彼の肩を掴んだだけになった。

しかし、それでエコーははっとしたように猫を取り落とし、私の顔をまじまじと見ていた。

「エコー、今、何をしていた？」

思わず、声が低くなってしまい、彼を責めているような錯覚を持つてしまった。

「ごめん。別に君を責めている訳ではないんだ」

「先生、ごめんなさい」

辛そうにうつ向く彼にこれ以上言及することはできなかった。エコーは私を見ずに、箒を拾い上げると、教会に逃げるように走り去った。

そして、その夜、エコーは家に帰って来なかった。

第四夜：崩壊

エコーが教会に帰って来なくなつて、一週間が経つた。

私は日々の仕事が手一杯でエコーを探しに行くことができなかった。しかし、それも私の言い訳にすぎないと言うことは重々承知だ。三日の時点では、あまり心配していなかったのだが、四日目の朝、玄関先にエコーのものと思われる修道服があつたとき私は急に恐ろしくなつた。

彼が、私の知っているエコーとは異なつてしまつたとしたら、と思うと、日々を言い訳にしてしまう。

そして、次第に噂話を聞くようになった。それは、教会の中であつたり、街廻りの途中であつたりしたが、いつも同じ内容のものだつた。

「この頃、街の外れで猫の死体が増えている。それはどうやら、教会にいた子供が関わっているらしい」と。

建前上、私は否定せざるを得ないが、嘘ではないのだろう。

恐れていたことが起きた。彼に恐怖の眼差しが向けられることもそう遠くないだろう。

その前にどうにかしなくてはならない。

夜、私は早々に教会の戸締まりをし、法衣を脱いで、黒のジャケ

ットを着ると、街の外れに急いだ。

街の人からの話から場所はおおよそ見当がついた。しかし、私がそこに着いたときには、猫の死体はおるか、人の気配さえなかったけれども、地面に微かにこびりついている血痕が噂の正当性を現していた。

このまますぐに帰る訳にもいかず、私は付近を路地裏を中心に調べてみた。

エコーが、いるかもしれないと思ったのだ。彼は先日、路地裏で寝たことがあるとそうもらしていた。私は注意深く辺りをうかがった。

そして、何回目かの通路、月明かりに照らされて、初めて会った時のように、そこに、エコーがいた。

まさに今狩りをせん、と猫の首に手をかけ、視線は真っ直ぐに猫に向かっている。

「エコー！」

思わず叫んだ。私の声に彼が反応したのが一つの幸いか。彼の力が弱まった瞬間、猫は身を翻し、彼の拘束から逃げ出した。

彼は私の方を向き、ゆっくりと瞬くと呆然としたように呟いた。

「…どうして、来た、んですか？」

「やはり、君だったんだね」

お互い、シヨックが大きいのか話が噛み合っていない。エコーは大きく目を開き、私を見ていた。その顔を見たとき、私は声をかけたのを酷く後悔した。彼の瞳が激しい後悔で傷付いているように見えただけだ。

「約束、守れなかったんだね」

「…我慢、できなかつたんです。俺は元々そういう人間なんだ。すぐに変わることなんてできません」

そついうエコーの視線が泳ぐ。何かを探るような、辺りを窺うような。

「帰ろう、エコー」

私の言葉に彼の動きが止まる。私を見る目は責めるように煌めいていた。

「私の自分勝手なエゴかもしれない。…けれど、私は君を離したくない」

尚も彼は動かない。

何も言わずただ私を見ている。やがて、観念したように彼はゆつくりと口を開く。

「俺がいたって、先生が不利なだけなのに。街の人が俺にいいイメージを持ってないって分かってる。それなのに、先生は俺を連れて帰るというんですか」

「私が、一緒にいたいんだ」

私はできるだけはつきりと言ったつもりだった。しばらくの間、私とエコーの睨み合いが続いた。お互い引く気がなかったが、妥協したのはエコーだった。彼が頷くのを見て、私はやっと表情が和らぐのが分かった。頷いたまま俯いていた彼の腕を取り、私は元来た道に戻る。

掴んだエコーの腕から、微かな鼓動が感じられ、私は何故かとても安心していた。

第四夜：崩壊（後書き）

随分間が空いてしまいましたが、もうしばらくお付き合いください。

第五夜：月夜

道すから教会が近付くにつれ、エコーの体調が悪くなつていくのに気が付いた。呼吸が早くなり、足元もおぼつかない。私の腕に寄りかかるようにして、ふらふらと歩く。

自宅よりは近い教会にエコーを連れ、椅子に座らせると彼に向き合い、少し屈んで顔を覗き込んでみた。

ギリ、とエコーが私の腕を握る手に力がこもったのが感じ取れた。きつく眉根を寄せて、噛み締めている唇にはほんのりと朱が浮かんでいる。とても苦しそうなのは分かるのだが、どう声をかけていいか分からず、ただエコーの瘦せた背中をさすっていた。

やがてエコーの掌が私の腕をなぞり、手首に達した。そして、もう一方の手で私の手を取り、掌に鼻をすりつけて、軽く食むような真似をした。ちらりと見える飢えた表情から悪戯ではないと確信する。先程の猫を逃してしまった所為かもしれない。

不意に彼は身体ほとんどを私に預けるようにしてしがみついてきた。縋るように見上げてきたエコーの頬は紅潮し、浅く呼吸をする口腔内からはやけに赤い舌が見えた。

「先生、…我慢できない」

切なげに謝罪する彼の声は淫美に響き、聖職者たる私でさえもくらり、と目の前が揺れた気がした。私は眉間を指で押さえ、めまいを抑え込んだが、なかなか止みそうにない。

「貴方が、近くに来るたびに、貴方の血の匂いがするんだ。…こんなの、拷問だよ。我慢したってし足りない」

エコーの声がとても身近に感じる耳のすぐ傍で囁かれているのだ。彼の荒い息遣いにつられるように私の呼吸もせわしくなっていく。「先生、食べていい…？ 食べさせて」

吐息に熱がこもり、近づく気配に息が詰まる。

とつさに私は彼の肩に手をかけ、彼の身体を引き離した。月光下のエコーの瞳は暗く淀み、正気が消えかかっていることを確信させた。

決断しなければならない。

私は深呼吸をして、上がった息を整えた。そして、エコーを真っ直ぐに見据えた。

「エコー、これから先は私が死ぬまで、私の血肉だけを糧にしなさい。他の人間や動物は殺してはいけない。約束、できるかい？」

「うん。我慢、する」

だから、と低く唸ってエコーは私の肩を押し、私は椅子の背に押さえ付けられた。彼は私の首筋に顔を埋め、すぐに訪れた鋭い痛みには私は顔をしかめた。私は悲鳴を抑える為に奥歯を噛み締めて目の前にあるエコーの肩に額を押し付けた。

首筋の肉が食い干切られて咀嚼されていく音が聞こえ、何度も叫びそうになる。それでも私はエコーの身体を抱きしめ、時には彼の服を握りしめて痛みに堪えた。

やがて、無くなっていく血液の所為で頭に酸素が行かず、思考が途切れ始める。少しずつ指先に力が入らなくなり、彼の服が掴めなくなった。

「エコー、……」

霞む視界で彼の名前を呼んだその瞬間、突然痛みが消えた。

やけに慌てた声でエコーが私を呼んだような気がするが、遠く意識の中では反応しようもなく、私はそのまま、目を閉じた。

深い眠りの淵で不意に左手が暖かいような気がして私は目を覚ま

した。

視線の先には見慣れた天井が。身体を起こすと首筋から肩にかけてに痛みを感じた。触れてみると、そこには歪ではあるが包帯が巻かれていた。

何があつたのだろうか…。

辺りを見回すついでに窓の外を見遣れば、教会が見えた。その瞬間、昨日の出来事がフラッシュバックのように思い出される。

首筋に噛みつかれたが死ぬことはなかった。エコーが自分で抑制したのだろうか。

「エコー…？」

左手を握つたまま眠っているエコーに声をかけてみる。彼が昨日私をここまで運んでくれたのだろう。

声に反応したのか目を擦り、顔を上げて、私が眠っていないことが分かると、彼はずつと握つたままだった手を即座に放し、壁まで後退した。

「どうしたんだい？」

「先生、…ごめんなさい！」

「大丈夫だよ。気にしなくていい」

「でも、だって…、先生、昨日あのまま気をうしなつて。俺が見境なくなつちやつたから、先生が辛いのに、分からなくて」

放っておけば、いくらでも自分を陥れそうなエコーを黙らせる為に私はまだ少しふらつく頭を押さえながら彼の近くまで歩いた。

うまく体勢が取れずに足元がふらつくが、それを誤魔化しながら私はエコーを抱きしめた。

びくりと身体を震わせて彼は腕の中で抵抗するが、私はそれを許さなかった。

「君は私を殺さなかった。それだけで十分な進歩ではないかな？
今までの君の食事の際にはみんな死んでしまったのだろうか？ でも私は死ななかった。それは君が君自身を抑制できたからだ」

「それは、先生の声が聞こえたから、…」

「ここまで連れてきてくれてありがとう。包帯も巻いてくれたんだね」

「いいえ、そんな。俺が、したことですから」

いつまでも私の身体に顔を押し付けてしゃべるのは照れているのか。

私はエコーを抱きしめたままベッドに向かい、彼を抱き上げて横たわらせた。そして、私も彼の隣に寝転ぶ。彼は大きな目を見開き、私を見上げている。私は彼に笑いかけると布団に潜りこんだ。

「今日は特別な用事がないし、このまま少し昼寝をしよう。休息を取ることも大事なことだよ。神も休息を取ったからといってお怒りになることはないだろう」

エコーを抱き寄せて先に目をつむると、僅かに逡巡したような間の後、エコーは私の胸元に擦り寄ってきた。猫のようなその仕草に口元を緩めて私もまた束の間の眠りに落ちた。

第六夜：懷疑（前書き）

クライマックスです。

もう少しおつき合ってくださいませ。

第六夜：懷疑

エコーが帰ってきたからといって、これまでと変わらない日々が続く訳ではなかった。それどころか、街の人の彼に対する反応は冷たくなるばかりだった。

彼を連れて歩けば、街の人たちの視線が痛い。向けられている本人は余計に感じるらしく、次第にエコーは外に出なくなり、彼の行動範囲は自宅から教会までと教会前の広場のわずかな空間のみになった。

「先生、やっぱり俺がいたら駄目ですよ」

人がいなくなった夜の教会で、椅子に座ったエコーが私に言った。私は教壇の上で少し見下ろすように彼を見た。

「…君は、何も心配しなくていいんだ」

私は全てのものから、彼を守るつもりだった。神以外の存在にこんなにも執着するなど、私は聖職者として失格なのかもしれない。そうしたらこの街にもいられなくなる。全てを放棄してエコーと旅に出るのもいい。気ままに暮らすのも一つの手だ。

「先生…？ どうしたんですか？」

そんなにも長く私は黙っていたのだろうか。エコーが心配そうに私を見上げてきた。

「…エコー、いつかこの街を出ようか」

「っ、何言ってるんですか！ この街に神父さまは貴方しかいない。貴方がいなくなったら…この街の人はどうするんですか」

「本部に連絡をすれば、代わりの人間を寄越してくれる。訳を話せば、私は資格を剥奪されるかもしれないが、ね」

「そんな…」

エコーは声にならない、といった様子で私を見た。
今までの生活を全て捨ててしまえるくらい、私はエコーを大事に
思っていたのだ。

「どうして、… どうしてそこまで僕のことを気にかけるんですか？
僕になんか、そんな価値のないのに……」

自分を卑下する彼に何か言ってやりたくて、私が口を開いたその
時、突然、教会の扉が開いた。

「神父さん！」

振り向いた私の視線の先にいたのは、森の近くに住む一人の青年
だった。家から走ってきたのか、膝に手をつき、肩で息をしている。
「ラウエくん？ どうしたんです？」

「母が、母が森で人影を見たというんです。森に何かいる、と。誰
かが迷い込んだだけかもしれないが、万が一のことを考えて、つ
いてきてもらえませんか？」

切々の息の合間にそう頼まれれば、神父としては放っておくこと
はできない。しかし、今の私はすぐに反応できなかった。

「神父さん？」

ラウエくんの怪訝そうな顔から目を逸し、エコーを見ると、彼は
私を少し睨んでいた。

「行ってください。行かないでどうするんですか」

「……分かった。行こう、ラウエくん」

渋々頷いて歩き出すが、彼の不審そうな視線は私の背を射て、私
は一通り居心地の悪い気分を堪能した。

森についた私を待っていたのは、ラウエくんの他何人かの街人だ

った。

「お待ちしてりましたよ」

「森は広いですからね、何人かで手分けしようと言っていたんです」
「三人ずつくらいに分かれましょう」

そう言つと、彼らは二つのグループに分かれ、その中の一つに私は付いていった。

夜の森は暗く、月の光でさえ届かない。

果たして、こんなに暗い森の中で人影を見ることは可能だろうか？

「神父さん。…神父さんはどうしてあの子供と一緒に住もうと思われたんですかい？」

「どうして今、そのような事を？」

質問に質問で返した私を囲むように彼らは立ち止まった。なにか嫌な予感がした。無理矢理にでもエコーを連れてくれば良かった。私は一瞬躊躇した後に口を開いた。

「…彼は私に似ていたんです。誰にも愛されずに育った私と。私は幸いファーザーに拾われましたが、あの子を救うのは今まで誰もいなかった。それでも彼は私の前に現れました。だから、引き取ったんです」

「そうですか。でも神父さん…、俺たちはあの少年が怖くて仕方ないんだ。あいつの目は獣の目だ。到底人間とは思えねえ。きっと神父さんも騙されているんだ」

「あいつが来てから神父さん、すっかり変わって、前とは別人みたいだった。そうしたら、あいつが原因なんだって思うしかないでしょうよ」

口々にまくしたてる街人の言葉を上の空で、私は別の事を考えていた。エコーの身が心配だった。別の道を進んでいった彼らの行方が分からない。私はすぐにでも教会に帰りたいが、囲まれてい

るためそれも叶わない。

周りを見回していた私を、彼らが気の毒そうに見たのが気になった。彼はため息を吐くと、私にこう言った。

「あの子を手放す気にはなりませんか？」

「私はエコーと生きていきたい」

「…仕方、ないですな」

突然の銃声。

振り返った私の目に猟銃を高く上げたラウエくんが写った。銃口からはまだ白煙が細く立ち上っている。

「エコーに何をするつもりですか？」

「消えてもらうんですよ。ここから」

「この世界から、ですか？」

目に力を入れて、そう畳み掛けるように尋ねると、目の前の彼は嬉しそうに笑った。

「さすが神父さん。察しがいい。少しの間でいいんです。すぐに終わります」

「断ります！」

そう叫ぶと、私は身を翻した。振り返った私にラウエくんは銃口を向けたが、撃てるはずもなく、私は教会に向けて一目散に走り出した。

第六夜：懷疑（後書き）

次が最終話になる予定です。
きつと週末にアップするので楽しみに。

最終夜：別離

教会に着いた私を待っていたのは、十数人の街人と、倒れて動かないエコーだった。

街人のほとんどがどこかしらに傷を負っているらしく、そこから絶え間ない喘ぎ声が上がっている。

教会内とは思えない惨状に私は声を失った。

「あ、神父さん！ これでもう大丈夫ですぜ」

その悪意のない街人の言葉を聞いて私は彼に意味のない殺意を抱いた。いくら殺意を抱いたとしてもエコーが帰ってくる訳ではない。

私はエコーの傍に寄ろうと歩き出した。地面が歪み、自分の足がおぼつかないのが分かった。

「エコー、……」

呼んだ私の声はかすれ、自分の声ではないようだ。

うつ伏せに倒れた彼の身体の下からは血が滲み出し、もう手遅れなのだと思うより他なかった。私は思わず彼の身体を抱きしめた。冷たい肢体は何も返さないが、そうせざるを得なかった。

「神父さん……？」

背後からの声に緩慢に振り返れば、心配そうな顔で私を見ている。彼は足を引きずっていた。

「どうして、殺したんですか？」

「いや……だつて」

「何故殺した！ あの子はただ生きていたいただけだつた！」

普段の喋り方さえ忘れてしまうほど、私の心は怒りと自分のふがいなさに苛まれていた。彼は私の剣幕に言葉を失っていた。今はそれをフオーする気にもなれない。

「彼がいることであなたに害が及ぶからです」

冷徹な声が響き、姿を現したのはこの街の最高権力者だった。

「あなたのその首の包帯、彼の仕業と言うことは分かっているんです。このまま行けばあなたは殺されていたかもしれない。…あなたも分かっていた事でしょう？」

「それはそうですけど、これは彼との約束です。私は死ぬことも覚悟の上でした」

「それですよ。あなたはその少年に心を傾けすぎた。神父は皆に平等でなければならぬ。そうでしょう？」

ねめつけるような彼の瞳に私は何も返すことができなかった。それが事実だからだ。

「あなたは住人からとても好かれている。だから、これだけの人数が集まったんですよ。あなたはこの街に必要な人間だ。そのためにはその少年は殺さなければならなかった。そうゆうことですよ」

もう、何も言うまい。

私はだんだんと冷たくなっていくエコーの身体を抱き上げて、街人らに背を向けた。

「あなたが、エコーを殺さなくても、私はここを出ていくつもりでした。…何もかも、遅かったんですよ。本部には私が連絡を出しておきます。数日後には新しい神父が来るでしょう。それまでは色々辛抱してください」

「お待ちください！ 神父さま！」

町長さんが私の法衣の裾を掴むが、私は構わずに歩き続けた。
「どうしても、どうしてもここにどどまる気はありませんか？」

「しつこいですよ。私の決めた道です。あなた方にとにかく言われる筋合いはない」

私が強く言い返せば、町長さんは素直に手を離れた。好かれていると言うのは本当なのかもしれない、と今更ながらに思った。

「すみません。今まで、ありがとうございました」

振り返り、一言そう呟いた後は私は二度と振り返ることはなかった。

そして、私はこの際限のない後悔と共に、街を後にしたのだった。

最終夜：別離（後書き）

これで物語は終わりですが、彼の旅は始まったばかりです。

ここまでお付き合い頂いた方、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2854b/>

十字夜の月に祈る

2010年10月8日15時16分発行